

地域農政未来塾研究報告



続きまして今年初めての取組となった2つの事例について報告を行います。
ひとつめは、地域農政未来塾研究報告です。
筑前町では、人材育成のために、
さまざまな職員研修への参加を進めています。
地域農政未来塾とは、農政担当職員の養成講座です。
実際に研修に参加した蘇木から報告を行います。

入庁2年目、農林商工課の蘇木と申します。
よろしくお願いします。

地域農政未来塾とは・・・

○全国町村会が実施する、農政担当職員養成講座。

○地域農政未来塾の目的

「農業・農村を取り巻く環境は厳しくかつ近年大きく変化しています。このような状況に対応するため、地域の実情を把握し、国の政策についての十分な理解とともに、農政の理論に通じた有能な農政担当職員の養成が喫緊の課題となっています。

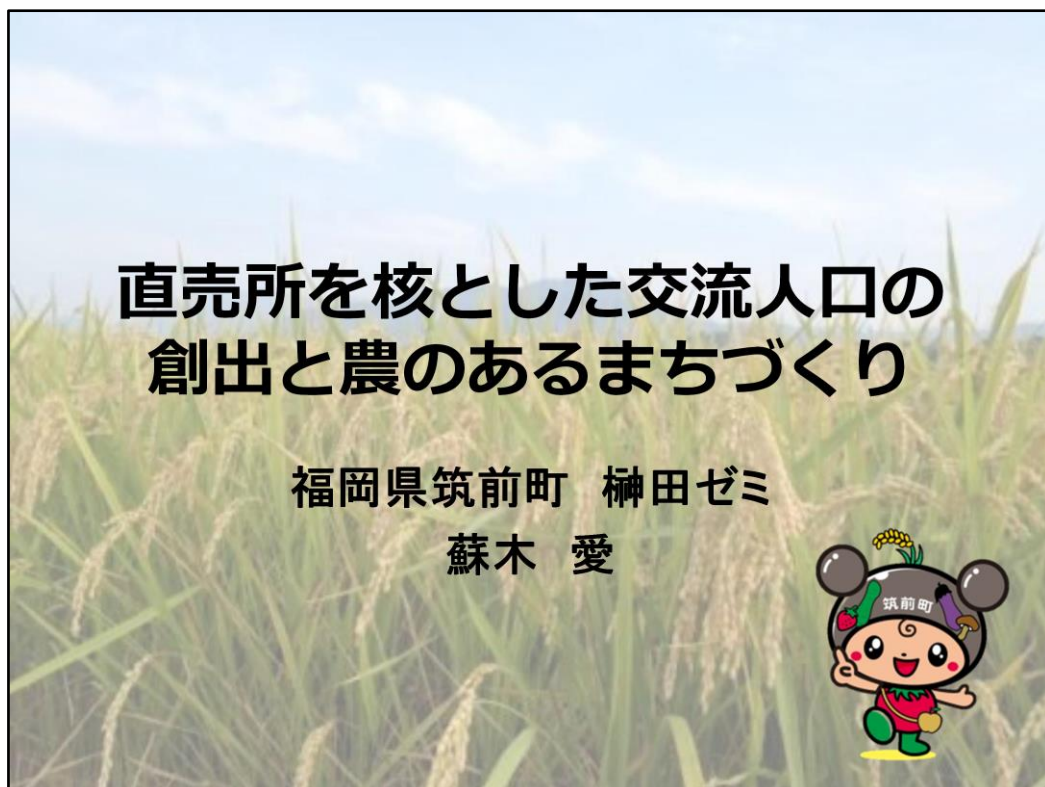
このため、自ら地域の課題に気づき、学び、考え、提案し、そして実行できる町村の農政担当職員を養成する本格的な講座を開講するものです。」(募集要項より抜粋)

今回、私は全国町村会が実施する
地域農政未来塾に参加する機会をいただきました。
地域農政未来塾とは、農業・農村を取り巻く厳しい環境や
田園回帰の潮流を受け、地域の実情を把握し、
自ら地域の課題に気づき、学び、考え、提案し
それを実現できる町村職員の育成が目的です。

地域農政未来塾の特徴

- 少人数教育(全国から20名程度)
- 一流の講師陣からの直接指導
- これからの農業・農村政策に必要な知識や能力を、幅広くかつ体系的に学ぶことができる
- 受講生、講師との人的ネットワーク形成

地域農政未来塾の特徴は、少人数制で今回は全国から19人が参加しました。昨年5月から計8回の講座が設けられ、名古屋大学教授の生源寺塾長を筆頭に、一流の講師陣から直接授業を受けました。また、ゼミ形式で4人の主任講師に5人ずつ所属し、各町村の問題に対して課題を発見し、解決策などの研究をしてきました。ゼミでは、地域の実情を互いに話し、意見を出し合いながら課題解決となる切り口を見つけるという作業でした。



他の町村では「都市と農村の混在化」「農協不在」
「中山間地域での農家減少・高齢化」などの課題がある中、
私は「直売所を核とした交流人口の創出と農のあるまちづくり」
をテーマに研究を進めていきました。
今回は限られた時間の中での発表ですので、
一部しかお話しできませんが、
筑前町の農業・農村の発展への私なりの意見をまとめています。

筑前町の農業を維持・発展させるには

○従来の筑前町の農業

米麦大豆を中心とした土地利用型農業

○現状と課題

担い手の減少・大規模化、高齢化

米価の低迷



大規模化が生産額の減少をカバーできていない

○解決策

都市住民による交流型農業の展開

地産地消のさらなる推進

みなさんご存じのように、筑前町は緑豊かな町ですが、一方で都市化も進んでおり、農業振興だけを進めていくことはできません。産業構造は、農業を含む一次産業が衰退し生産者の所得の減少、生産者数の減少、高齢化等の問題を抱えています。そんな中、私は解決策となるキーワードを二つ設定しました。それは、「都市住民による交流型農業の展開」と「地産地消のさらなる推進」です。



筑前町農業の現状と課題

まずは、筑前町の現状と課題です。

筑前町の概要

- ・ 農業：米麦大豆中心の土地利用型農業
ナス、キュウリ、ゴボウ、イチゴ等の
園芸、養鶏等の畜産
- ・ 農地面積：2,674ha
- ・ 農業従事者数：1,040人
- ・ 農業従事者の平均年齢：64.1歳



筑前町は、主に土地利用型農業が展開されています。

現在は、米麦大豆を中心に、

ナス、キュウリ、ゴボウ、イチゴ、ブドウ、ナシ、イチジクなどの
野菜・果樹が生産されています。

養鶏や酪農・肉用牛生産も軒数は少ないながらも営まれています。

町の総面積6,710ヘクタールの約4割にあたる

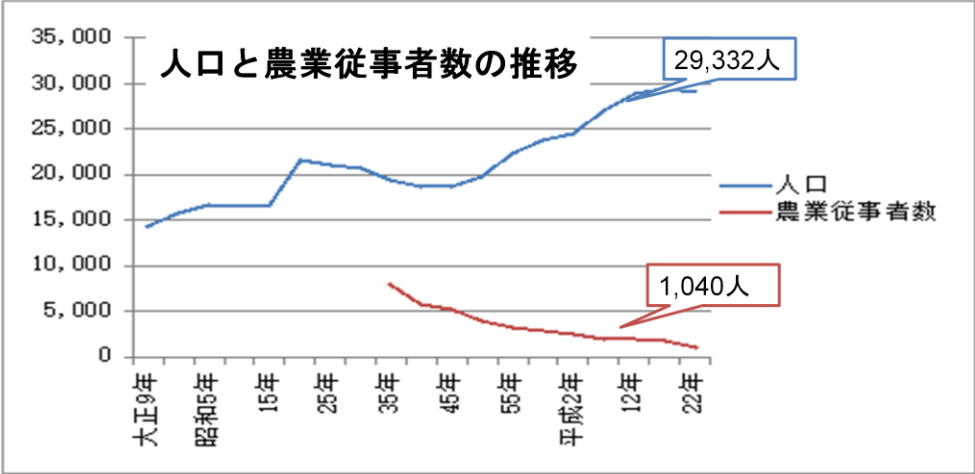
2,700ヘクタールが農地であり、

27年度の農林業センサスによると

農業従事者数は1,040人と年々減少しており、

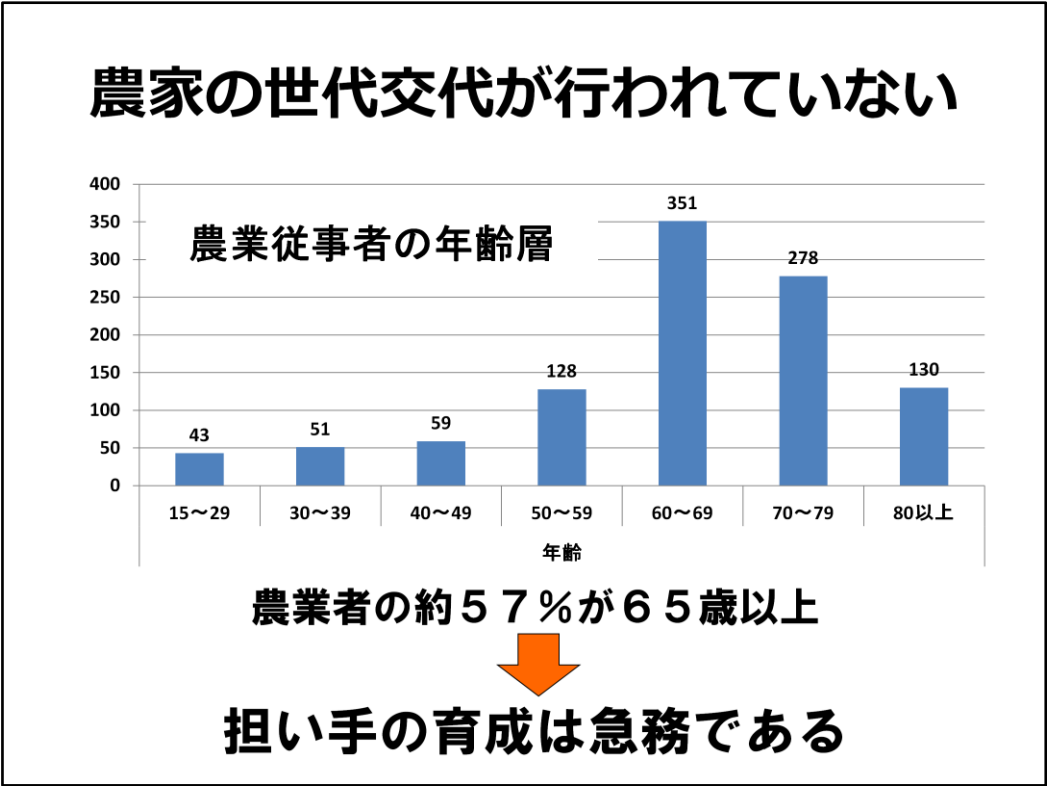
担い手の平均年齢は約64歳です。

人口増加と農業従事者数の減少

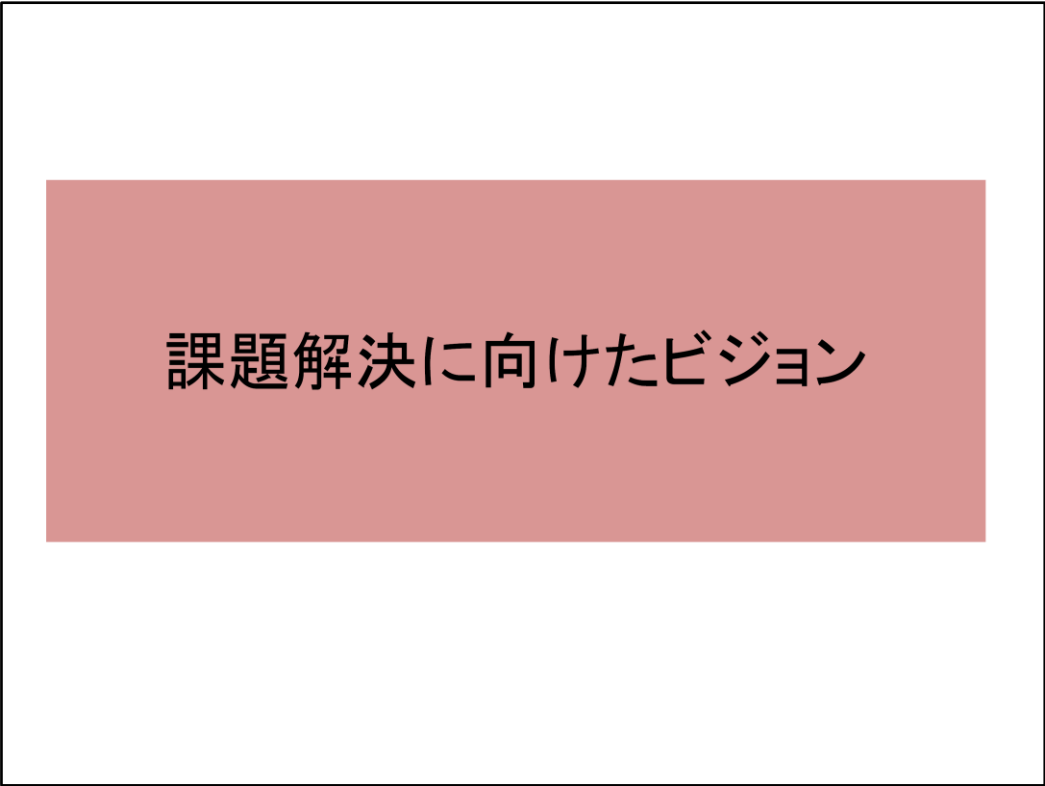


➡ 農業従事者数は減少の一途

1つ目の課題としては「農家戸数の減少と高齢化」です。
人口はゆるやかに増えていますが、農業就業人口は年々減少しています。



さらに、農業従事者の年齢層は平均64.1歳と全国平均の66.4歳よりは少し若いですが、農業者の世代交代が行われていない状況です。後継者の有無についても、4割以上がいないと答えており、今後の農地の管理者としての担い手の育成は急務となっています。平野部の圃場整備されている優良農地のように、認定農業者や集落営農組織が中心となり農地を集めて管理できればよいですが、中山間地域などの条件不利地域では、農家の減少や高齢化が進み農地が荒れてきています。



課題解決に向けたビジョン

そこで、これらの課題を解決するために
いくつかのビジョンを作成しました。

1 都市住民との交流活動

- 好立地条件：福岡市、久留米市から1時間以内、
山麓線の開通→良好な交通アクセス



『都市住民による農地の管理』



ファーマーズマーケット「みなみの里」

・体験・観光農園の整備



まず突破口として考えたのは、
福岡市から1時間以内という好立地条件です。
この立地条件を活かし、
都市住民に農地の管理をしてもらうことが可能ではないかと考えました。
幸い山の麓には「ファーマーズマーケットみなみの里」があるため、
そこを拠点に体験農園等を整備することにより、
都市住民による山間部周辺の農地の管理が期待できます。

2 「みなみの里」のハブ拠点整備による地産地消のさらなる推進

- ・ 学校との連携



- ・ 病院・福祉施設、企業との連携
- ・ 南部住民向けのマルシェや出張販売の開催



地域内流通をより促進させる

また、みなみの里を中心とした、地産地消の更なる推進が地域活性化のポイントになると考えています。現在、町内の学校給食において、地元産野菜の利用率は57%です。みなみの里も農産物の納入を行っています。給食だけでなく、小学校単位で学校農園を利用し、米の栽培などが行われています。学校での農作業体験は、子どもたちに興味を持ってもらうチャンスとなり、食育にもつながります。南部の企業誘致地帯の企業や工場では、社員食堂での地元産農産物の利用や職員研修などで農作業体験を提供することも考えられます。宅地化が進む南部の住民に対しても、マルシェや出張販売などを開催し、地元産農産物に触れる機会を増やすことも重要です。

まとめ

- 北部地域は「みなみの里」を拠点に農村としての機能を強化
- 南部地域の住民を巻き込みながら、地域内で農産物の流通を促進
- 居住地と農村のゾーニング



「とかいなか」

筑前町の農業・農村を維持・発展

最終的には、北部地域は都市住民と交流しながら農地の管理を実施し、農村としての機能強化を図ります。

また、南部地域の住民を巻き込むことで、地域内で農産物の流通を促進させます。

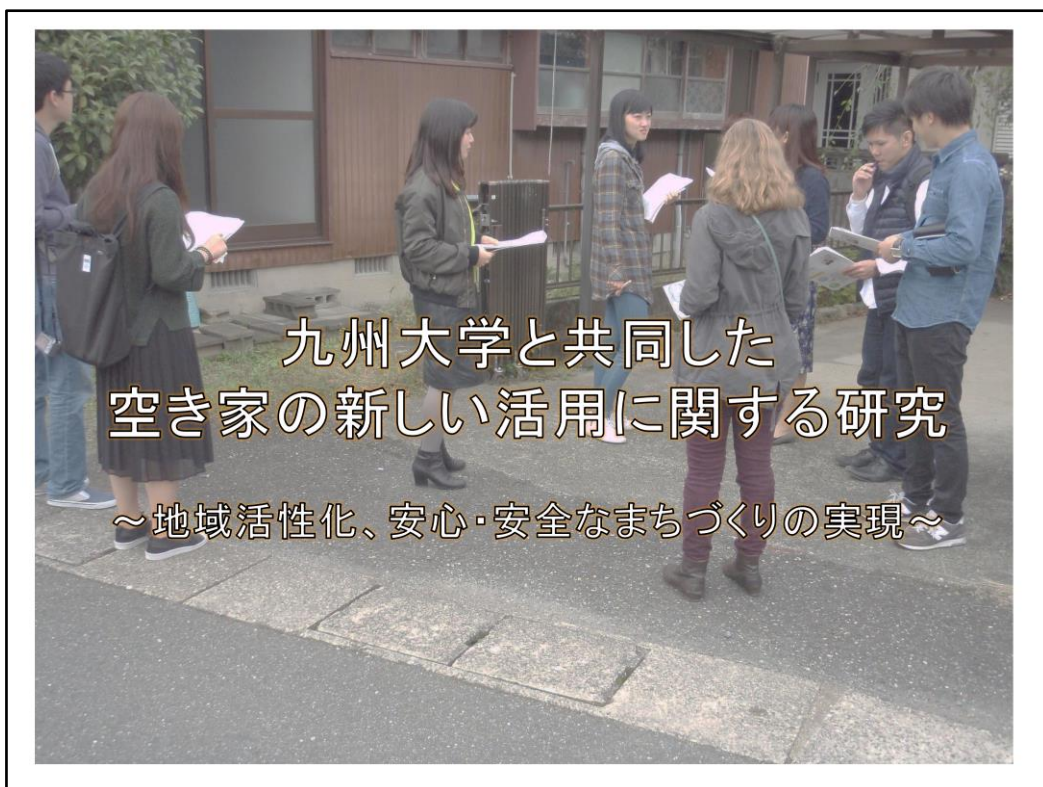
さらには、居住地と農村のゾーニングをすすめ、都会に近い「とかいなか」として、農業・農村を維持・発展していけるのではないのでしょうか。

以上で、発表を終わりますが、最後にこの一年間の研修を通じ、さまざまな経験をすることができたことに感謝申し上げます。

この塾の中で、主任講師をはじめ全国の町村職員と交流することは、様々な課題や町の強みなどへの気づきとなり、このように発表することもできました。

また、全国にネットワークができたことは最大の宝だと思っています。

これからもこの経験やネットワークを活かし、筑前町の役に立つ仕事ができるよう日々勉強したいと思います。
これで私からの報告を終わります。



九州大学と共同した 空き家の新しい活用に関する研究

～地域活性化、安心・安全なまちづくりの実現～

つづきまして、空家活用の事例報告を行います。
現在、全国的に空き家は増加傾向にあり深刻な問題となりつつあります。
筑前町においても空家対策を昨年度策定した
総合戦略の最重要施策の1つに位置付け、
対策の推進によって、地域活性化、
安心・安全なまちづくりの実現を目指しています。
また、国土交通省は、全国の自治体が独自に行なっている
「空き家バンク」の情報を一括して閲覧できるホームページを
2017年度中に開設すると発表しました。
こうした背景を踏まえながら、筑前町の地理的な立地条件、
住民構成や産業などの地域特性にふさわしく、
地域活性化に繋がる活用方法やサービス、
利用者が購入・賃貸したくなるような
空き家の新しい内装や外観などについて、
現地調査や他の地域の事例調査などの研究を行ってまいりました。
そして今月3日、町に対し7つの研究成果が報告されました。
本日は、その中で効果的と思われるアイデアについて、
九州大学大学院「芸術工学府デザインストラテジー専攻」の
黒木泰地（くろきたいち）さん、
加峯（かぶ）まりえさんのお二人から発表していただきます。

空き家の新しい活用に関する研究

研究①

「高齢者介護施設の利用者を対象とした空き家活用法の提案」

九州大学芸術工学府デザインストラテジー専攻

黒木泰地さん

研究②

「新しく起業する人のためのまち おためし！ちくぜん」

九州大学芸術工学府デザインストラテジー専攻

加峯まりえさん

※空き家活用研究報告については、読み原稿なし。



共同研究を行った九州大学の教授、准教授、大学院生のみなさん

今回発表された内容は、
筑前町における空き家活用法のアイデアとして、
今後、実現に向けて調査・研究を行っていく予定です。

以上、九州大学と共同した
空き家の新しい活用に関する研究発表を終わります。